

等類のこと

森田 峠

和歌の本歌取

都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白川の

関 能因 法師

都をば青葉とともに出でしかど紅葉ちりしく白

川の関 源 頼政

この二首は『等類』ではないと、『篇突』(李由・許六編・元禄11年刊)・『三冊子』(土芳著・安永5年刊)・『俳諧問答』(青根ガ峰)ともいう。許六・去来著・天明5年刊)などに書かれている。

『俳諧問答』には、

▲定家の卿の判に言はく、頼政が歌は能因が歌を本歌として心・言葉少しも変らねども、これ等類にあらずとあり、その理由を、▲頼政が歌は、色をよみたる歌なりとして、本歌取を承認している。

また、『去来抄』(去来著・安永4年刊)に、後述する芭蕉の「葛の葉」の句と去来の「薺の」の句との類似に関して、去来が次のようなことを書いています。

▲和歌には、

- ④ 干 鮭にかへてや蝦夷が着衣始 去来
干 鮭に衣かへけり蝦夷の人 尚白
⑤ 榎の木の花にかまはぬ姿かな 芭蕉
桐の木の花にかまはぬ落葉かな 凡兆
⑥ 弱法師我門ゆるせ餅の札 其角
門口や牛王めくれて初時雨 彦根の句
⑦ 白菊の目に立てて見る座もなし 芭蕉
秋は先づ目に立つ菊の苦かな 去来
⑧ 玉祭けふも焼場の夕けむり 芭蕉
春雨にけふも焼場の夕けむり 伊丹の句
⑨ 川風やうすが着たる夕涼 芭蕉
帷子は浅黄きて行く清水かな 尚白

①は『篇突』『去来抄』『俳諧問答』に載っている。丈艸が等類だと言ったらしい。

『俳諧問答』には、

▲翁の句は「葛のうら」といふ古歌の詞を返し、初めて「葛のおもて」とはいはれたり

▲子が句は(中略)葛よりは鼻の先に朝顔のありける事を知らぬと、嘲りたる句なりとある。結局は『去来抄』にあるように、

許六「等類にあらず。趣向かはれり」

去来「等類とは謂ひがたし。同想の句なるべし」

ということになるらしい。

②は『去来抄』と『旅寝論』(去来著・安永7年刊)とに載っている。『旅寝論』では、芭蕉が、

花咲かぬ常盤の山の鶯は己鳴きてや春を知るらん
といふに、

紅葉せぬ常盤の山の小牡鹿は己鳴きてや秋を知るらん

とよみても、等類にはならず苦しからざるよし。俳諧には遠慮する事と見えたり

つまり、和歌では本歌取が認められているけれど、発句では認められないということを書いているのである。

「白川の関」の和歌について、『等類』ではないと、各書にわざわざ書いているのは、等類と見る意見が一方にあったからであり、発句のほうでも等類が当時多かったからであろう。そのゆえか、蕉門の俳書には『等類』を論じた箇所が多い。

等類か否か

「等類」かどうかの問題で蕉門の諸俳書に採りあげられた句を列挙してみよう。

① 葛の葉の面見せけり秋の風 芭蕉

〔今朝の霜とも〕

薺の裏を見せけり秋の風 去来

〔風の秋とも〕

② 野を横に馬引きむけよ時鳥 芭蕉

面梶よ明石のとまり時鳥 野水

③ 弥平衛とは知れど憐や鉢扣 伊丹の句

月雪や鉢たゝき名は甚之丞 越人

〔くとも〕

▲野水が句は明石のほとゝぎすを吟ず。等類をのぐるべしと言ったとある。芭蕉の句は『奥の細道』の那須野における作。

しかし、結局は『去来抄』にあるように、去来の、

▲一句ただ馬と舟と変へ侍るのみ、句主の手柄なしという意見で『猿蓑』には入集されなかった。

③は『去来抄』と『旅寝論』とに載っている。『去来抄』では、芭蕉が、

▲「月雪」といへるあたり、一句働き見えて、しかも風姿有り。

(中略)されど、共に鉢扣の俗体を以て趣向を立て、俗名を以て句飾り侍れば、もつとも遠慮有るべしと言ったとある。

去来も同意見らしく、『旅寝論』に、

▲其の心ざす所替り有り。然れども句においてまぎらはし。遠慮あるべしとある。

結局は等類でいけないという審判が下されている。

④は『俳諧問答』の去来執筆の部に載っている。

▲尚白が産み所と思が産み所は大きに相違なる所より出で侍れば、等類にてはなし

と、みずから等類ではないと判断している。

⑤は『旅寝論』に載っている。其角と凡兆との間で論争があったようで、其角の、

▲かくのごとく名人の句を冒し来らんは、情なき作者と言ひつべしという酷評が記されている。

⑥は『去来抄』と『旅寝論』とに載っている。

初めに見たときは等類と思ったけれど、今思うと等類ではないという意味のことを言っている。もちろん、去来の言である。

123

122

月刊
俳誌

万雷

殿村菟絲子主宰

誌代送料共
半年 四二〇〇円
一年 八四〇〇円
万雷発行所
〒230 横浜市鶴見区
東寺尾北台17-26
振替 横浜 6400 番

見本誌千共300円(切手可)

⑦も『旅寝論』に載っている。

芭蕉の句は女流俳人園女の清楚さをあいさつ風に詠んだもので、
去来句は、後年、去来が園女を訪ね、先師のことなど思い出話を
している中で即吟したものである由。去来みずから、

▲つたなき句ながら、先師の八目に立てて見るVの句に等類なる
まじく覚え侍るVと、等類ではないと言っている。

⑧⑨は「去来書簡」(元禄八年正月二十九日、許六あて)に②③
とともに書かれている。

▲右の句吟味に付き、猿蓑入集の句、ことごとく除き申し候。則
ち翁の高判にて御座候Vとあり、芭蕉の判断により②③④⑤の後作
はすべて『猿蓑』に入集しなかったと言っている。

同案

猪の寝にゆく方や明の月 去来

この句について、『去来抄』と『旅寝論』とに記述がある。

去来が自信句として芭蕉に示したところ、芭蕉は『新古今集』の

一首を挙げて、

▲そのおもしろき処は古人もよく知れば、

帰るとて野べより山へ入る鹿の跡吹き送る萩の
上風

とは詠めり。和歌優美の上にさへ、かくまでかけり作したるを、俳
諧自由の上に、たゞ尋常の気色を作せんは手柄なかるべし。一句お
もしろければ、しばらく案じぬれど、とかく詮なかるべしVと、こ
の句を否定したという。

そのあとへつづけて去来が自分の感想を書いている。

▲其の後おもふに、此の句は、「時鳥鳴きつる方」といへる後京
極の和歌と同案にて、いよいよ手柄なき句なりV

「後京極」は「後徳大寺」の誤りで、「百人一首」で有名な、
時鳥鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残
れる

と同案だから駄目だと自分で非を認めているわけである。

ここで「同案」と言っているのは、「同想」とほぼ同じ意味では

ないかと思われる。

等類と同想

①のところで、去来が、

▲等類とは謂ひがたし。同想の句なるべしVと言っていたが、
「等類」と「同想」(「同案」「同竈」とも書かれている)とは、どう
違うのだろうか。

『去来抄』に「同想」についての説明がある。

▲去来曰はく、蕉門に同案同竈といふあり。これは前に作りたる
句の鋳型に入りて作する句なり。たとへば、竿が長くて物につかゆ
ると言ふを、刀の鐙が障子にさはる、あるいは杖がみじかくて地に
とどかぬ、と吟じかゆるなり。同じ想の句は手柄なし。されど兄よ
り生まれ増したらんは、又各別なりV

どうやら着想の同類であることを「同想」と言っているらしい。
とすれば、「等類」はもっと類似の度が甚だしいもので、着想だ
けでなく表現までもよく似ていることをいうのではないだろうか。

試みに俳文学者の考えを聴いてみよう。

岩田九郎著『去来抄評解』(有精堂・昭26刊)の「語釈」の項を見
ると、

等類―同じ詩想を詠んだ句。内容が同じようなことを詠んだ句。
同案の句―鳥ならば別々な鳥も同じ巢から巣立つというように、
全く同じような表現法で、別な想をいゝ表わした句。

『校本芭蕉全集』第七巻俳論篇(角川書店・昭41刊)の宮本三郎
校注「去来抄」の八注Vを見ると、

等類 同じ趣向・作意を詠んだ句。

同案 詞・表現は似ているが、趣向・作意の異なる句。ただし、
「等類」と混じて同義に用いられる場合もある。

どうやら岩田解と宮本解とは一致しているようである。しかし、
宮本解にあるように、蕉門でも「等類」と「同案」とを混同して用
いていたようであり、厳密な区別はなしがたい。

甚だ無精で研究不熱心ではあるが、我々今日の実作者としては、
「等類」も「同案」も似たもので、今日言うところの「類想」のこと

40代の主宰の
清澄な新風

糸瓜

主宰 篠崎圭介

雑詠7句圭介選
誌代1年7,200円

新会員募集中

糸瓜社

〒790 松山市御幸2-7-3
振替/徳島14619
電話0899(76)6657

主宰
河野南畦

あざみ

■新会員募集中■
入会自由
会費（誌代送料共）
一年 9000円（概算）
見本誌 700円（切手可）

あざみ編集部
〒222 横浜市港北区太尾町520
振替 東京4-159155

だと思っておいてよいのではなからうか。

許される類想

④について、『俳諧問答』で、

▲第一此の句選集に見えず。選集に出でぬ句は等類の難なるべしと、俊成ものたまひ侍る▼というようなことを言っている。今で言えば、さきの句が公式に未発表であれば類句とはならない、ということにならうか。句帳に書いてあるだけで、句会にまだ出さず、まして俳誌にまだ載っていないという段階では、未発表ということになり、後から類句が出てきても、先取権を主張できないというわけである。

前項の「等類と同想」のところで、『去来抄』の一文を紹介したが、その末尾のほうに、

▲同じ想の句は手柄なし。されど兄より生まれ増したらんは、又各別なり▼というようなことが但し書きのように書かれていた。

「同想の句は手柄がないけれども、先の句よりも勝っておれば、

とよりも、自分に気をつけよと、さすがに芭蕉らしくきびしい教訓を与えている。

口先だけで偉そうに言うのではなく、芭蕉はみずから実践した。

元禄七年夏、芭蕉は嵯峨に遊び、

大井川 浪に塵なき夏の月

という句を詠んだ（『旅寝論』その他、多くは上五が「清滝や」となっている）。

その年の九月二十七日、芭蕉は最後の旅先であった大阪で女流俳人園女の家を訪ね、園女の清楚さを、

白菊の目に立てて見る塵もなし

というあいさつ句に詠んで歌仙の発句とした。

『笈日記』（支考編・元禄8年刊）によると、十月九日（死の三日前）、薬の服用後、芭蕉は支考に向かって、「大井川」の句は「白菊」の句に似ているから作り変えろと言ひ、

清滝や波に散り込む青松葉

と改めたという。

この話は『浪花日記』（浪花筆・元禄8年）『去来抄』『三冊子』『旅寝論』『俳諧問答』などにも載っている。

今の我々から見ると、「塵もない」というところだけが同じであって、他は全く違うのだから、類句とはとうてい思えない。どうして芭蕉は心ががめたのだらうか。あるいは、連句の「去り嫌い」と同様の考で、二句の制作時が近かったから、一層強く心ががめたのかもしれない。

現今の類句

それはそれなりに価値を認めてよい」という見解が示されているわけである。

一九八四年版の『俳句年鑑』（角川書店刊）に鷹羽狩行氏が「類想句と類似句」という一文を書いている。両者を定義して、

▲類想とは、表現以前の発想の段階に属し、句の出発点である▼
▲類似句は表現に関することである▼と言っている。

ここで鷹羽氏の言う「類想」と「類似」が、蕉門における「等類」と「同想」とその定義の上でどう一致するのか、あるいは一致しないのか、甚だ厄介であって、私にはよくわからない。鷹羽氏は古典用語とは関りなしに「類想」と「類似」の二語を用いて類句の問題を論じているのかもしれない。

自句の等類

『三冊子』に、

▲等類の事、おろそかにすべからず。師のいはく、他の句より先づわが句にわが句、等類する事を知らぬものなり▼とある。人のこ

鷹羽狩行氏が今年の『俳句年鑑』に「類想」問題を採りあげて執筆するほど、今の俳誌、俳壇には類句（鷹羽氏の言う「類似句」）が多い。俳句人口の増加とともに類句がいよいよ増えてゆくような気配である。その原因としては、

- (1) 句作を創作活動と考えず、稽古事、習い事と思ひ込んでいる。
- (2) 入選したさに人の入選句をまねる。
- (3) 文学的才能が無いのに俳句の世界に入ってくる。

文学的才能の持ち主がそんなに多いはずがなく、俳句人口の驚異的な増加は、ちょうど大学が学術研究の場から一般教養を身につけるだけの場に変質してしまったように、文学としての俳句が一般的趣味としての俳句に変質してしまっていることを如実に示していると思う。

そして、大勢としての大学の変質を今更どうすることもできないように、大勢としての俳句の変質もまたどうすることもできないだろうと私は思う。

しかし、変質してしまった大学にあっても、きびしい自覚のもとに学業に励む者がきつと少数はいる。変質してしまった俳句の世界においても、純粹で崇高な文学としての俳句をきびしく求めつづけてゆく実作者がきつといるだろう。ほんとうの俳句は、その少数の心ある人たちの間で押し進められ、次代へ受け継がれてゆくであろう。